

成果の説明書

(氏名) 藤本 哲	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>平成 29 年度の重要事項は以下の通りである。</p> <p>論文</p> <p>「機能別分業に伴う待ち時間と多能工化による生産性向上」『高崎経済大学論集』第 60 巻、第 2・3 合併号、2017 年 9 月、pp. 1-15。</p> <p>Adam Smith によるいわゆる『国富論』は、分業が生産性を格段に向上させることを、示し、分業の効果が広く知られるきっかけとなった。しかし、分業が総人件費を抑えつつ生産性を高めることは、経営学の中では知られているものの、それほど一般的に知られていない。その仕組みを最初に指摘したとされているのが、Charles Babbage による 1963 年出版の本、『On the Economy of Machinery and Manufactures』である。その仕組みは経済的スタッフィング（沼上幹、2004『組織デザイン』（日経文庫）日本経済新聞社、による用語）の原理と呼ばれている。</p> <p>これまで、経営学の中では、経済的スタッフィングの長所については、多くの論者が指摘していた。本稿は、Babbage の例を分析して、経済的スタッフィングの裏面にある短所（待ち時間とそれに伴う機会損失、仕掛品）を明らかにするとともに、それら短所を補う取り組み（多能工化・兼業化等）が既に存在していることを指摘し、それら取り組みの可能性について述べた。</p> <p>生産性向上の指標は、1 人あたり生産性ではなく、時間あたり生産性とすべきである。1 人あたり生産性を指標とすると長時間労働が誘発され、時間あたり生産性は下がる。これでは work life balance は悪化し、持続可能な社会の実現は遠のいてしまう。一国全体の生産性を高めつつ、持続可能な社会を実現するための方法を考えるために参考となるのが、経済的スタッフィングと多能工化である。</p>	
<p>2 その他の事項</p> <p>大学院経済・経営研究科において数少ない大学院生のうち 1 人の研究指導に従事した。数少ない学部研究生のうち 1 人を受け入れ、その指導に従事した。</p>	
<p>3 次年度以降の計画・抱負</p> <p>組織構造の公式化次元に関連して、論文を準備中であり、2018 年度中に発表の予定である。</p> <p>大学院経済・経営研究科において数少ない大学院生 1 人の修士論文執筆を指導する。学部研究生を 1 名受け入れ、指導する予定である。</p>	